

	さとう ひでお
氏 名	佐藤 英夫
学 位	博 士 (医学)
学位記番号	新大博(医)第1720号
学位授与の日付	平成20年1月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
博士論文名	Gender Differences in Susceptibility of Asthma to Active Smoking -Questionnaire Based Analysis in the Niigata Prefecture, Japan- (気管支喘息患者の能動喫煙に対する感受性の性差に関する検討)
論文審査委員	主査 教授 鈴木 宏 副査 教授 下 條 文 武 副査 教授 鈴木 榮 一

#### 博士論文の要旨

##### 背景:

気管支喘息の発病因子、また増悪因子として喫煙の関与は以前から指摘され、調査されている。依然として本邦における喫煙率は高い(喘息患者においても)。一方、能動喫煙と気管支喘息の関連や性差による分析・報告は少ない。本研究は、気管支喘息における能動喫煙の影響とその性別による差異を解析、検討した。

##### 方法:

2000年9月から10月の2ヶ月間に、新潟県において気管支喘息治療をうけている患者とその主治医に対して、喫煙状況に関する調査を、質問票を用いて行った。

この質問票は新潟喘息治療研究会において作成され、患者には喘息のコントロール状況、喘息症状の残存、日常生活の満足度を、主治医には患者プロフィールや喘息治療薬の使用状況についての回答を求めた。

患者は現喫煙群(CS)、過去喫煙群(ES)、非喫煙群(NS)の3グループに分類しさらに性別で分割した。過去喫煙群(ES)は喫煙歴や禁煙後の期間の大小が混在するため評価が難しいと判断し、現喫煙群と非喫煙群を比較検討した。

##### 結果:

県下の病院及びクリニックより2947例の質問票を回収した。男性患者のうち340例(23.0%)はCS群、325例(22.0%)はNS群また、812例がES群であった。女性患者においては、109例(7.4%)がCS群、1132例(77.4%)はNS群で、229例がES群であった。

男性のCS群は、朝(起床時)と夜(就寝時)の喘息関連症状の残存と、起床時の喀痰と咳嗽および睡眠障害が男性のNS群と比較して有意に高率であった。2群の背景では、吸入ステロイドと経口徐放性テオフィリンの使用頻度がCS群で低率であったが、多変量回帰分析では朝の喘息関連症状に経口徐放性テオフィリンが関与する以外には、両薬剤の使用率の差は関与していなかった。一方、能動喫煙は朝の喘息関連症状・朝の喀痰・朝の咳嗽・夜の喘息関連症状および睡眠障害のすべてにおいて関与していた。

女性において、CS群は有意にNS群よりも年齢が若く、吸入ステロイドとピークフローメーターの使用率も高かった。また、能動喫煙の有無による喘息症状の差異を認めなかった。

男女ともCS群のブリンクマン指数は同等であった。

結語:

能動喫煙の喘息症状に対する関与に性差を認めた。男性においては能動喫煙が多様な喘息症状に関与しており、喫煙中止が喘息症状の改善に寄与する可能性が高い。一方、女性においては喘息症状に関して、能動喫煙の関与は得られなかった。女性喘息患者にも禁煙は積極的に勧めるべきであるが、女性の方が喫煙による気道障害を受けやすいとする報告や、黒人男性のほうが黒人女性よりも喫煙による肺機能の低下が著しいという報告もある。本論文は、人種や性差による喫煙の感受性には差があることを示唆する点で有用であると考えられる。

#### (論文審査の要旨)

能動喫煙と気管支喘息の関連についての性差による報告は少ない。本研究は、気管支喘息における能動喫煙の影響とその性差について検討した。

2000年に、新潟県下で気管支喘息治療を受けている患者(現喫煙(CS)群、非喫煙(NS)群に分類)とその主治医に調査を行った。解析対象は2,947例で、男性のうち340例(23.0%)はCS群、325例(22.0%)はNS群で、女性においては、109例(7.4%)がCS群、1132例(77.4%)がNS群であった。男性のCS群は、朝(起床時)と夜(就寝時)の喘息関連症状の残存と、起床時の喀痰と咳嗽および睡眠障害がNS群と比較して有意に高率であった。女性において、CS群は有意にNS群よりも年齢が若く、吸入ステロイドとピークフローメーターの使用率が高かった。一方、能動喫煙の有無による喘息症状には差異を認めなかった。能動喫煙の喘息症状は、女性より男性において強い関連が認められた。

本研究は、我国における喘息と喫煙の実態、特に性差による喫煙の感受性に差があることを明らかにした点に、学位論文としての価値を認める。